優良診療施設視察研修　『あたたかな急性期病院』

長野県茅野市、組合立諏訪中央病院を視察

京都府診療施設協議会の平成２０年度優良診療施設視察研修は、１０月２３日、２４日の両日に府内の６国保診療施設から、事務職員９人、看護師７人、技術職４人と本会職員ら計２２人が参加して、組合立諏訪中央病院を視察した。

病院概要のビデオを見た後、仲本事務部長より病院の理念や沿革等の概要説明を受けた。

諏訪中央病院は八ヶ岳を望む理想的な環境で、長野県の茅野市、諏訪市、原村による一部事務組合として設立され、「やさしく、あたたかい、たしかな医療をめざす」を理念に掲げ地域に根ざした医療活動を展開している。

同病院は、昭和 25 年に 22 床で、ちの町国保直営病院として開設。昭和 33 年に町村合併により、現在の２市１町の組合立病院となり、病院移転、新築を経て病床数を拡大し、現在は病床数 362 床（一般病床 317 床、療養病床 45 床）で運営している。この間、老人保健施設「やすらぎの丘」や東洋医学センター、看護専門学校、透析クリニック等を開設・運営し、幅広い分野で充実した医療提供体制を構築している。救急医療も、24 時間 365 日体制で「断らない医療」を展開され、最新治療の導入で「やわらかな医療」にも力を入れている。

そうした背景から、自治体立優良病院表彰や救急医療病院表彰を受賞されているが、

現在は「赤字経営で優良施設ではないんですよ」と笑って話す。しかし国の評価と県からの信頼はもちろん厚い。今後はＤＰＣに備えて電子カルテの導入をめざしている。

参加者からは、公立病院改革への見解や具体的な病院運営について質問が多数寄せられ、事前に示していた質問にも、詳しく説明と回答をいただいた。

この後、各専門分野に分かれて施設内を見学し、現場の体制等を肌で感じる良い機会となった。

同病院を視察訪問された各施設の三名の方々から感想を書いていただいた。

「地域医療での臨床検査」

公立山城病院臨床検査科　　福頼　加奈子　氏

今回、訪問させていただいた組合立諏訪中央病院は、「病院らしくない病院、心の休まる環境としての病院」というのを病院づくりの考え方として数々の工夫をされていた。

この研修で私はドック・健診センターが別棟にあるということに注目した。近年ドック・健診の受診者は病院受診者とかかわりのないように違う導線で検査をすすめるのが望ましいとなっているからである。

ドック・健診は完全予約制で予約が満杯になっている状態という。前日には採血のスピッツも準備されており一日ドック受診者でも結果説明を含めても昼過ぎには終了するということだった。朝一番に採血、病院の検査室にて測定し全部の検査が終了するころには採血結果もでており後は診察をするという体制となっていた。精密検査が必要となる場合はその場で予約がとれるようになっていた。

一日ドックの受診者にはドック・健診センターより食事もでるというところにも驚いた。昼過ぎには全員の診察も終わるという。検査技師も一人常駐しており検査はもちろんのこと検査データの解説などを入力している。近年忙しい方が増えておりドック・健診の受診を迅速にこなし納得して帰ってもらう事は重要なサービスであり、またそれが地域医療に貢献する事になると感じられた。

「命を支える医療」

公立南丹病院事務職員　　馬渕　勝英　氏

訪問させていただいた諏訪中央病院は、八ヶ岳のふもとで「やさしく、あたたかい、たしかな医療をめざす」を基本理念に掲げ医療活動を展開する３６２床の茅野市・原村・諏訪市による一部事務組合立の自治体病院です。

まず、外来にカーペットが敷かれ、各階はカラフルなフロアーカラーが取り入れられ、絵画・彫刻などの芸術作品が多数展示されており、においのない病院としても工夫されていたことに驚かされた。

そういった素晴らしい施設環境のもと、慢性疾患と高齢社会にあって、健康維持増進、疾病の予防・早期発見、治療・リハビリ、社会復帰・在宅医療と一貫した関わりに早くから取り組まれているのが非常に印象的でした。医療をその中心に据えながら、福祉のサイドに進んで踏み出されています。

約 18,000 坪の敷地の中に、緩和ケア病棟、療養型病棟、介護老人保健施設、ドック健診センター、訪問看護ステーションを運営し、それらの有機的な連携の中で、まさに予防からリハビリまでの一貫した医療を実践されています。なかでも、地域に密着した手づくりの医療を実践するとして、「ほろ酔い勉強会」と題し 160 回に及び地域住民に対し、病院で行われている様々な診療情報を公開し、保健衛生に関する生涯学習の場を提供され、地域のネットワークづくりを実践されていることには驚かされました。

全国的に医療崩壊が叫ばれている中、自治体病院の経営はますます厳しいものが予想されますが、職員は皆医療機関のプロパーだという自信を持って、地域医療の拠点として躍進されていることに非常に感銘を受け、我々も医療従事者としての責務を再認識させていただくことができ、非常に有意義でした。

（あいにくの雨天のため八ヶ岳の山並みを見ることは叶わなかったが、病室から眺めるアルプスの情景を想いうかべ病院を後にした。）

「力強い緩和ケア支援」

京丹後市立久美浜病院　　富川　美恵　氏

訪問させていただいた諏訪中央病院は、早くからこの地における地域包括医療・ケアの活動の拠点として、保健・医療・福祉のネットワークを構築され、幅広い活動を展開してこられたことで、広く知られているとおりである。さらに、近年の医師不足の中にあって、「多くの研修医が集まる病院」としても注目されている。

院内を歩くと、光の効果的な取り入れ方、木のぬくもりを活かしたコーナー、手入れの行き届いた木々や花々、絵画・写真・書・彫刻などが展示された廊下など、病院が癒しのある環境づくりに尽力されていることが伝わる。そして、地域の方々が多種多様なボランティア活動で、その環境づくりに積極的に参加しておられることからも、地域に根ざした病院という印象を受けた。

今回、私が是非見学させていただきたかったのが、「緩和ケア病棟」と７月から始められたという「院内デイ」。残念ながら実施時間の関係で「院内デイ」の見学は叶わなかったが、具体的な運営方法や患者さん・御家族の反応などを伺い、当院でもよく見かける光景（病室で叫んでいる患者さん・車椅子でナースステーションに取り残されている患者さん等々）を思い、スタッフ不足と多忙な業務の中で、患者さんの安全と個々の気持ちのケアのために、いかに対応していくかのヒントをいただけたように思う。

「緩和ケア病棟」は、家庭に近い環境に整えられ、自宅の居間や寝室に居るような感覚で、御家族も気兼ねなく泊まりこんで、スタッフと共に患者さんのサポートができるように配慮されていた。また、病棟・外来・訪問、全てを緩和ケアチームで担当されているとのことで、在宅緩和ケアまで一貫した支援体制のもと、患者さんや御家族は、どんなにか心強いことであろうかと感銘を受けた。

研修を終え、優良施設の活動から多くの“気づき”をいただいたことはもちろん、煩雑な日常を少し離れ、他施設の方々との交流でリフレッシュできたことも、自分にとって大変有意義だったと感謝している。